

校長室の窓から

カメさんの話

5月2日朝会「校長の話」から

みなさん、おはようございます。みなさんの中では、連休中に動物園、水族館など生き物を見に出かける人もいるかと思います。お家で犬や猫のペットや生き物を飼っている、という人も多いと思います。今日は、そんな生き物の話。校長先生が3年前まで飼っていたカメさんの話をしたいと思います。

飼い始めたのは、20年も前のことです。校長先生の息子（当時小学生）が「何か生き物を飼いたい」というので、世話のしやすいカメを飼うことにしたのです。そのカメの種類は「ミシシippiaカミミガメ」と言って、いわゆる「ミドリガメ」と呼ばれるものです。当時は、ホームセンターなどで売っていて、よく見かけましたが、この頃は「条件付特定外来生物」と言って、今は家で飼うことは認められています。お店で売ることでも買うことも禁止されています。何でも食べてしまうので、絶滅しそうな魚や小動物も食べてしまうので、川に放すことも禁じられています。カメは20年から40年も生きるもので、どんどん数も増えていくんですね。

飼い始めは、こんな感じです。5cmぐらいの小さな体ですが、「わがはいは、カメである。名前はまだない」という感じで、オスカメスかも分かりませんが、エサをモリモリ食べ、とても元気です。日の当たるところでは、丘の上にあがり、日向ぼっこをして、かわいかったです。

そこから時は過ぎ、17年たちました。小学生だった校長先生の息子も社会人になり家にはいません。

もうカメの体はすっかり大きくなり、30cm程になり、小さい時は小魚用の水槽で飼っていましたが、大きい衣装ケースで飼ってました。それでも、一日1回えさをあげ、水が汚れたら取り換えるぐらいの世話で、名前も付けず、オスメスのどちらかなんて特に気にしていませんでした。



そんなある日、うちに帰ると、カメの水槽の水が真っ赤かになっていました。水の中にあるカメの姿が見えないほど、赤い水でいっぱいになっていました。「うわあ～、大変！」「どうしよう？」

とりあえず、(カメなんて動物病院でみてもらえるのかなあ?) と思いながらも、見てもらえそうな動物病院を調べ、連れていくことにしました。

受付で「カメさんのお名前を教えてください」と言われ、「名前はないです」と答えたところ、「診察券とカルテを作るので、名前がないと困ります」と言われました。「ん……」(そういえば、クレヨンしんちゃんがカメを飼っていたなあ、名前は何だっけ……、あつ、思い出した“ビクトリア”だ)「じゃあ、『ビクトリア』にしてください」、「分かりました。では(診察券、カルテを)お作りしますね。」

そして、診察の結果を聞きました。獣医の先生からは、「レントゲンでお腹を見たら、卵がたくさん、ぎっしり詰まっています。たくさんの卵を一度にうまく産むことができなくて、出口で炎症を起こして、

出血したようです。貧血を起こしています。しばらく病院に通うこととなります。栄養になるもの、おさしみ、えびなどを食べさせてください」と言われました。

(家のカメはメスだったんだ。一匹しか飼っていなくても、カメは卵をつくるんだ) 17年飼って初めて分かったのです。(もっと、ちゃんと調べて、ちゃんと世話をしていればよかった。カメさん、いやビクトリアちゃん、ごめんね) という思いでした。

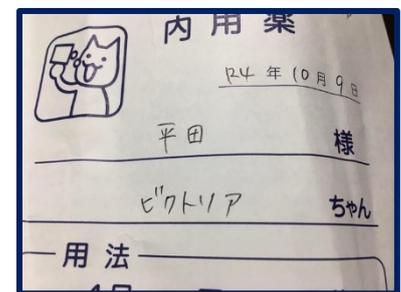
診察が終わり、待合室で待っていたところ「ひらたビクトリアちゃん！」って呼ばれました。「えー、そっちで呼ばれるの！」まわりで待っていた人も、(すごい名前、何の動物だ?) という目で見ているような気がして、ちょっと恥ずかしかったです。「薬が出ています。こちらを飲ませてください」

それから、二週間に1回、3か月ほど病院に通いました。薬は飲んだものの、刺身、エビなど与えてもまったく食べようとはしませんでした。

とうとう、ビクトリアちゃんの17年間の生涯は幕を閉じました。(もっと、カメのことをちゃんと調べて、ちゃんと世話をしてあげれば、もっと長生きできたのに。ごめんなさい) そんな気持ちでいっぱいでした。

動物(ペット)を飼う時は、最後までめんどうをみなくてはなりません。そして、かならず最後の時がやってきます。ですから、どんなに小さな生き物でも命があり、大切なものです。

みなさん、ぜひ、小さな命も大切に作る心をもってください。



これでお話を終わります。